



東京大学海洋研究所

ニュースレター

No.8 2002.12

●シンポジウム

「海洋学の未来と東京大学」について

海洋生態系動態部門微生物分野 教授 木 暮 一 啓

既に半年余りの日が経ってしまったが、2002年4月26日に東京大学海洋研究所で開催された、シンポジウム「海洋学の未来と東京大学」について報告したい。

海洋研究所が1962年に発足してから丁度40年が経つ。この間、海洋研究所は実質的に国内唯一の基礎研究および高等教育の場として我が国の海洋学の発展に多大な貢献をしてきたことは多くの人々が認めるところである。しかし近年、海洋科学技術センターを始めとしたいくつかの研究機関が海洋学の分野に進出してきた。一方では、国立大学の法人化に伴う研究教育組織の再編化の中で、東京大学の中における海洋研究所の位置づけが問われる状況となってきた。つまり、海洋研究所の存在が学内外から揺さぶられている。海洋研究所は今後どんな研究を担い、どのような海洋科学を切り開いていくべきか、それが他の大学や研究機関とどのように関わるか、さらに学内の一附置研究所として東京大学の未来にどのような貢献をしようかが問われようとしている。

東京大学には海洋研究所以外の部局にも海洋研究に関わりを持つ多数の教官がいる。これまで海洋研究所の構成員がそれらの教官と個別に関わりを持つことはあっても、より総合的な意見交換をする場を持つことはなかった。本シンポジウムでは、海洋学に関わっている学内の他部局の教官を講演者として招き、それぞれの研究内容の紹介と将来の方向性、あるいは海洋研への注文などを率直に述べて頂くことから、今後の海洋研究所の研究の方向性、共同利用のあり方、国内外で果していくべき役割などを明確化していくために開催された。企画は将来構想委員会による。

表に講演者とそのタイトルを示す。所内からは海洋研究所の将来構想あるいは現在の研究動向について小池所長、塚本教授がそれぞれ講演した。他部局の10人の方々

の中には東洋文化研究所の濱下教授および文学部の田村教授も含まれている。

- 小池勲夫（海洋研究所）
「海洋研究所の将来構想」
- 浦 環（生産技術研究所、海中工学研究センター）
「大学における海中工学研究開発は海洋関連科学へどう寄与するか」
- 金沢敏彦（地震研究所、附属地震地殻変動観測センター）
「地震と海洋学の未来」
- 濱下武志（東洋文化研究所）
「海と東洋文化」
- 塚本勝巳（海洋研究所）
「海洋研究所における海洋科学研究の動向」
- 森澤正昭（理学系研究科附属臨海実験所）
「海洋学と生命科学」
- 古谷 研（農学生命科学研究科、水圏生物科学専攻）
「生物生産と海洋学」
- 住 明正（気候システム研究センター）
「気候システム研究と海洋研」
- 山形俊男（理学系研究科、地球惑星科学専攻）
「海洋気候力学の研究から」
- 浦辺徹郎（理学系研究科、地球惑星科学専攻）
「海洋学の新たな対象としての海底熱水活動」
- 磯部雅彦（新領域創成科学研究科、環境学専攻）
「海岸工学と海洋学」
- 田村 毅（人文社会系研究科、欧米系文化研究専攻）
「海と文学」

内容が多岐に渡るため、ここで全体のまとめをするのは難しいが、私なりに印象に残ったことを数点述べてお

きたい。

第一に今更ながら強調するのも変ではあるが、学内でこれだけ多くの海洋に関わる研究が進行していることに驚かされた。例えば、古谷教授、山形教授、浦辺教授らの研究内容は海洋研究所の教官によってやられていたとしても全く違和感がない。また、磯部教授による沿岸と外洋との関わりの研究、金沢教授の地震の話、住教授の気候システムの話、森澤教授の海洋生物の話なども、海洋研究所の研究内容と十分な接点がある。今後学外と共同研究をする前に、まず学内の他部局との可能性を模索し、海洋研究所の学内での存在基盤をより強くすることを考えてもいいのではなかろうか。

第二に、新たな方法論、とりわけ工学的なアプローチの導入について考えさせられた。浦教授のロボット映像は実に印象的だった。すぐにどう使えるかはまだ分からない。でもとにかく新しい何かがそこにあることが感じられる。古谷教授は衛星を積極的に利用している。この手法は既に海洋研究者の間で一般化しているが、ちょっと前まではごく一部の人のみのツールだった。海洋研究所の看板は2つの研究船であり、今後もそうあり続けるべきであろう。ただ、逆に我々の意識は知らず知らずのうちに研究船に縛られ過ぎてきたのかもしれない。今後海洋観測に無人の自動計測をどこまで導入できるか、船だけでなくどのような手段を持ちこめるのか、それを海洋研究所だけでなく、国内外にどのように普及させ、海洋科学の幅を広げていくべきか。

我々にはそういう視点が必要だ。

第三に、文系の二人の先生の話には非常に引き込まれた。あちこちで頷かされ、あちこちで笑わされた。田村教授の白鳳丸乗船の話は我々理系の人間にとっては全く

異なる視点によるものだったし、海洋研究所へのエールは大変有り難く、心強かった。また濱下教授の「海を背にすれば日本は山国」という言葉が私にはことさら印象に残っている。また、お二人が傑出した話術の持ち主であることには疑いが無いが、我々も海の魅力をあのようになんとか一般の人に伝えることはできないのだろうか。

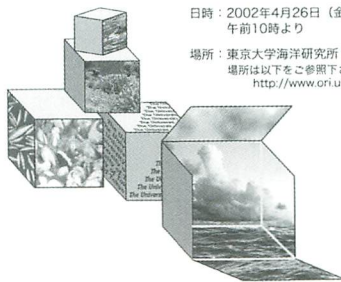
第四に、人類は遠くない将来深刻な食糧問題、環境問題に直面するだろう。もし我々が今、海の”全て”を知れば、ヒトという動物が地球上でやっていることをより客観的に評価し、その生き残りの可能性を示し、直面する問題を回避するための道筋を提案することができる。つまり海洋科学が問題解決の鍵を握っていることは間違いないし、それが我々の”売り”である。しかし、海洋研究所で実際にこれらの問題を真正面から扱おうとしている人、さらに近未来に何か強力なメッセージを発することができると考えている人はどのくらいいるだろうか。やはり我々の目の前には膨大な基礎研究課題が待ち構えており、みんなそれをやりたいし、それなしには先に進めないと思っている。では、そうした”海洋学的問題”と”人類的問題”の接点をどうするのか。あと10-20年ほど待って下さい、と言うのか、具体的なことは何も言わないことにするのか、あるいは接点を築くために何かを始めるのか。別の言葉で言うならば、磯部教授のようなアプローチをどう考えるべきなのだろうか。

幸いシンポジウムの参加者は100名を超え、活発な議論があった。全体を通じて受けた印象、考えさせられた内容は人それぞれであつただろうが多少なりとも海洋研究所のあり方を考える機会となっていれば幸いである。最後に、協力して下さった方々、とりわけ事務部の全面的協力に感謝したい。

シンポジウム 「海洋学の未来と東京大学」

日時：2002年4月26日（金）
午前10時より

場所：東京大学海洋研究所・講堂
場所は以下をご参照下さい：
<http://www.oriu.tokyo.ac.jp>



講演者および演題

10:00-
「海洋研究所の将来構想」

小池 聡太（海洋研究所）

10:10-
「大学における海中工学研究開発は、
海洋観測科学へどう寄与するか」

編 澤（産業技術研究所、海中工学研究センター）

11:00-
「地震と海洋学の未来」

金沢 敬志（地震研究所、気象地震地動観測センター）

11:20-
「海と東洋文化」

濱下 武志（東洋文化研究所）

11:40-
「海洋研究所における海洋科学研究の動向」

浦辺 敬司（海洋研究所）

12:00-
「海洋学と生命科学」

磯部 健郎（海洋学研究所、地球環境科学専攻）

12:20-
「生物生産と食糧安全」

古谷 孝（海洋学研究所、気象生物科学専攻）

14:30-
「気候システム研究と海洋学」

住 明正（気候システム研究センター）

15:10-
「海洋気候物理学の研究から」

山形 俊男（理学系研究科、地球惑星科学専攻）

16:00-
「海洋学の新たな対象としての
海流熱水活動」

磯部 健郎（海洋学研究所、地球環境科学専攻）

16:50-
「海洋工学と海洋学」

磯部 健郎（新領域創成科学研究科、環境学専攻）

17:40-
「海と文化」

田村 聡（人文社会科学研究科、東洋文化研究専攻）

18:00-
「懇談会」

問い合わせ先：
事務局
東京大学海洋研究所
E-mail: org@oriu.tokyo.ac.jp Tel: 03-5261-4405

白鳳丸南大洋航海 (KH-01-3)

海洋科学国際共同研究センター教授 寺 崎 誠

白鳳丸は2001年11月27日に晴海を出港し、南太平洋、南大洋での観測調査を終え、3月1日、95日ぶりに無事帰港した。本航海は『中部南太平洋・南大洋の生物活動と生元素の循環に関する研究およびオーストラリアー南極海嶺の地球物理学的研究』という研究主題からわかるように生物、化学、地学の3分野が協力して成立した航海である。所内からは23名、所外からは20機関から32名、計55名が乗船した。

主な研究項目は下記の11件である。

- (1) 植物プランクトンの現存量、生産量の測定と構成種の解析に関する研究
- (2) 動物プランクトン、特にオキアミ類、サルバ類、ヤムシ類の分布・摂餌生態に関する研究
- (3) 細菌群集の現存量測定と代謝活性に関する研究
- (4) 溶存・懸濁有機物の粒径分布と化学組成に関する研究
- (5) 微量重金属元素の鉛直分布に関する研究
- (6) CO₂分圧と全炭酸の分布に関する研究
- (7) 生物起源ガスの分布に関する研究
- (8) 海底地震計・シービームによる地殻構造の計測と精密地形の作成に関する研究
- (9) 深海曳航式磁力計による海底拡大測度の高解像度決定調査
- (10) 大気エアロゾルの分布と化学組成に関する研究
- (11) ラジオゾンデ観測に基づく海洋上の対流圏・下部成層圏における中小規模大気攪乱の研究

LEG-1はJGOFSに関連した研究に主体をおき、南太平洋でも陸の影響が少ない西経160線に沿った観測を行った。最初の測点到着までたつぷりと時間があつたので、採水グループ、ネットグループとも余裕をもって準備することができた。しかしラジオゾンデ観測グループは緯度1度ごとの観測を行ったので出港の晩から作業を開始した。東進して亜熱帯水域に入っても、海況はよくなり、船酔する者も結構いた。12月4日に日付変更線を通過してから、5日にかけて3点で海洋科学技術センターから依頼のあったARGOフロートブイを各1基投入してCTD観測を実施した。12月6日の夕食後に船上で赤道祭りをを行ったが、今回ははじめての若手研究者も多く、深夜まで余韻が続いた。出港から13日目の12月8日早朝に最初の測点1(0°、160°W)によりやく到着した。160度船上の10測点で採水、マルチコアによる採泥、ノルパックネット、ORIネット、鉛直多層式ネット、RMTによるプランクトン・マイクロネクトンの採集を行っ

た。当初は南緯50度まで南下する予定であつたが、途中、荒天のため47度までしか行くことができなかった。ラジオゾンデ観測は放球されたゾンデが32kmの高さまで届かないなど、はじめのうちはいろいろとトラブルがあつたが、作業に慣れると以後は順調で12月24日のクリスマスに最後のゾンデ(89個目)が放球され、これには乗船者の新年に向けての願いが書かれた短冊と一緒に取り付けられた。12月27日の朝、1ヶ月振りニュージーランドの首都ウエリントンに入港した。厳しい南極海での観測を前に、研究者、乗組員一同大いに異国での正月を満喫した。大晦日には松本紘一大使がご家族で差し入れを持って来船された。また寄港中にタンガロアを見学することもできた。

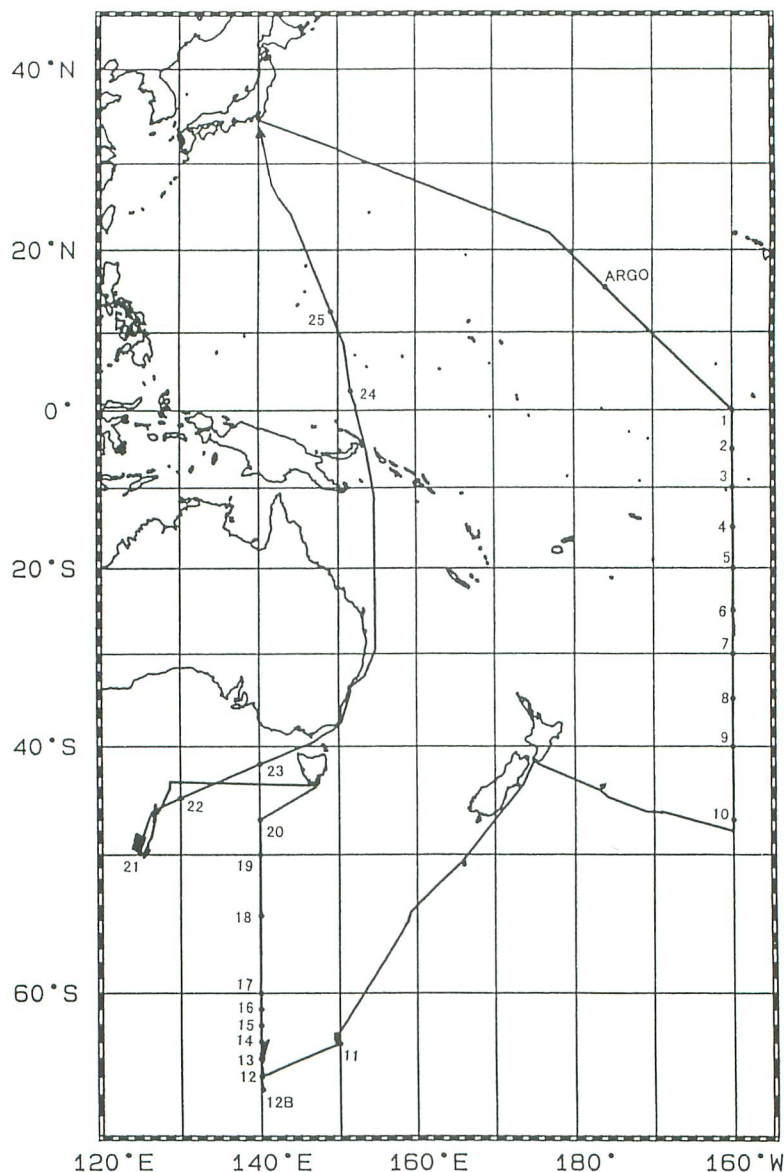
まだお屠蘇気分の抜けない正月2日に出港し、南極海を目指した。南極海は南大洋の南緯60度以南の海域の総称で、白鳳丸では過去にKH-68-4(堀部教授)、KH-71-5(坪田助教授)、KH-83-4(BIOMASS:根本教授・寺崎)、KH-94-4(川口教授・寺崎)の諸航海で観測を実施している。1月5日の晩に南極海に入り、6日の午前中に南緯62度14分付近で最初の氷山を視認した。この晩から南極巨大地震震央付近でシービームを用いた精密調査が開始され、貴重な資料を得ることができた。

LEG-2の観測は東経140度線に沿って行われた。今航海は4船による時系列観測の一環として行われたもので、140度線上では12月にオーロラ・オーストラリス(豪州)、1月に白鳳丸、2月にタンガロア(国立極地研究所がニュージーランド水圏大気研究所より傭船)、3月に砕氷船しらせによって統一した方法で調査が繰り返し行われるという画期的な計画である。各船での連携も密にとられ、例えば12日に白鳳丸で設置された系留系一式(セジメントトラップ、流速計)は2月下旬にタンガロアで回収された。1月10日にはバックアイスの密集した最南端の測点12B(南緯65度41分)に到着した。LEG-2では11測点で採水、採泥、ネット採集、表層ブイ実験などが行われた。特に測点18(南緯54度44分)でピストンコアにより良好な試料を採取できた時には、前回(KH-94-4次航海)は失敗しているだけに、ホットした気分になった。南極海ではほとんど太陽を拝める日もなく、海況もあまりよくない状態であつたが、予定の観測作業をほぼ遂行できたのは幸いであつた。1月22日にタスマニアのホバートに入港し、大半の研究者が下船し、代わって南極海嶺での調査を行う地学分野の研究者が乗船してきた。ホバートでは天候にも恵まれ、久しぶりの休暇を楽しむことができた。27日にホバートを出港し、一路南極

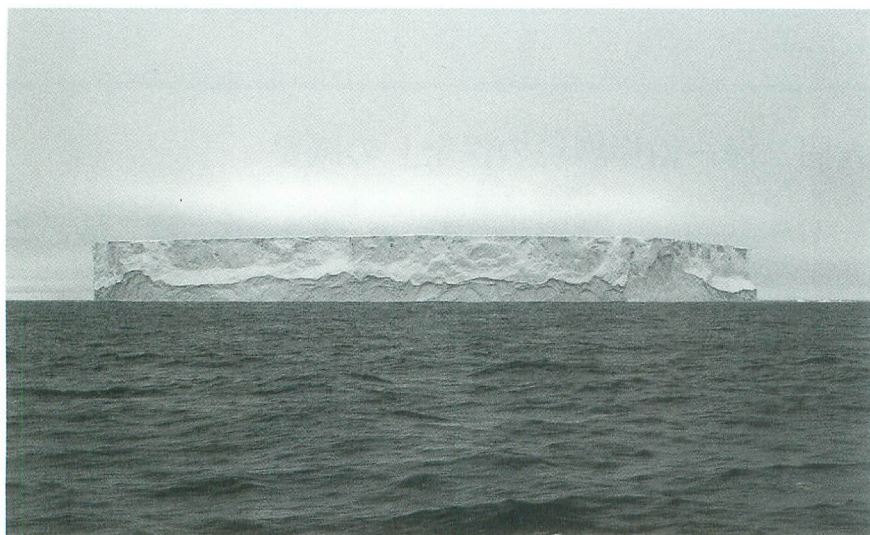
海嶺を目指したが、調査域が有名な暴風圏内にあるため、毎日荒天が続き、並波船長と天気図を眺めながらため息をついていた。幸い、後半に奇跡的に天候が回復し、海底地震計の設置と揚収、エアガン調査、シービームによる海底地形図の作成などをほぼ計画どおり行うことができた。このLEGでは調査域に到着する前にリサーチルームで南極海嶺の研究の第一人者米国オレゴン州立大学のDavid CHRISTIE教授に講演していただいたので、南極海嶺の特性について我々のような門外漢でも知ることができた。シドニー入港前夜は一同、航海中に冰山からとったパチパチと音の出る氷（専門家の査定では10万年前のもの）を入れた酒を飲みながら打ち上げ会を楽しんだ。最後の寄港地シドニーには2月12日に入港した。KH-83-4次航海の時にはオペラハウスの対岸の一等

地に着岸できたが、今回も前回と同じ郊外の不便な貨物岸壁についたのがっかりした。シドニーは2年前のオリンピックを機会に、街全体が一段ときれいになった印象を受けた。小生はここで下船し、シドニーー東京のLEG-4は海洋化学部門の小川浩史先生に主席研究員を務めていただいた。LEG-4では赤道域の2測点で採水を行い、他のLEG同様に表面海水を用いた研究、大気エアロゾルの観測が実施された。また観測機器管理室の三浦敏昭技術官らの尽力で航海中に立派な報告書も完成した。本航海が成功したのも並波清船長をはじめ乗組員の方々の協力と、幹事会メンバー（小川浩史助教授、蓮本浩志助手、西村昌彦助手、西川淳助手、沖野郷子助教授）による入念な準備によるものと深謝する次第である。

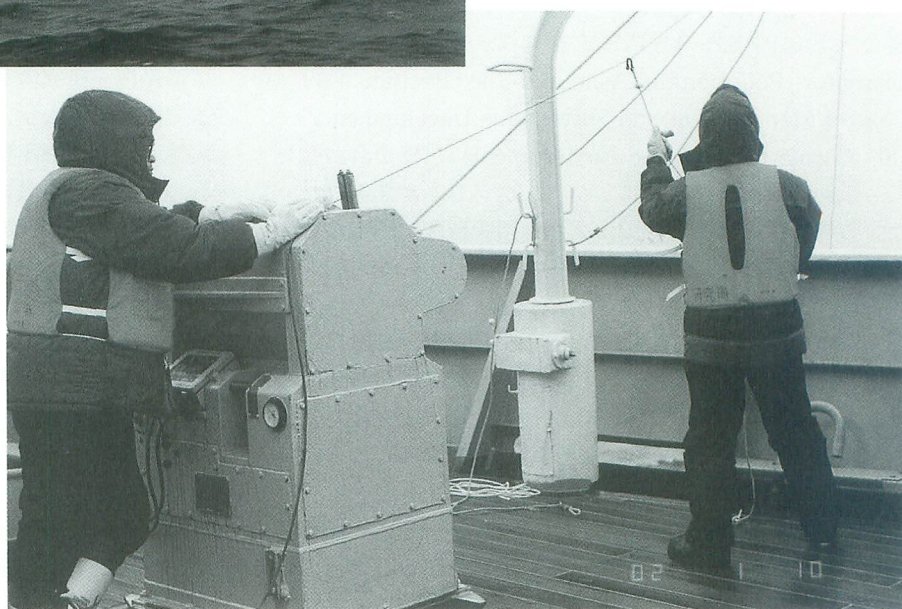
KH-01-3 TRACK CHART



航 跡 図



Leg-2 で出現した
テーブル氷山



前甲板における
ノルパックネット作業



ピストンコアの準備

国際会議「人間と海—沿岸環境の保全」の概要

大槌臨海研究センター教授 宮 崎 信 之

2002年7月8－12日の期間、International Conference “Man and the Ocean—Conserving Marine Environment”【国際会議「人間と海—沿岸環境の保全」】が国際連合大学、ユネスコ、岩手県、島津製作所、東京大学の共催で開催された。最初の3日間は、渋谷にある国際連合大学に国内外の専門家を招いて、(1) Endocrine Disruptor Pollution in Asia and the Pacific、(2) Coastal Management and Sustainable Development、(3) Marine Ecology and Environmentに焦点を合わせて、最新の情報交換を基にしたシンポジウムが開催された。この会議には、16ヶ国と3つの国際機関（国際連合大学、ユネスコ、ヨーロッパコミュニティー）から約50名の専門家が出席した。この国際会議は一般の人々にも公開していたので、初日は約250名、二日目と三日目はともに約120名の参加者があった。会場では37課題の口頭発表および9課題のポスター発表が行われた。発表内容の一部はOtsuchi Marine Science Vol. 28 (2003)に掲載される予定である。

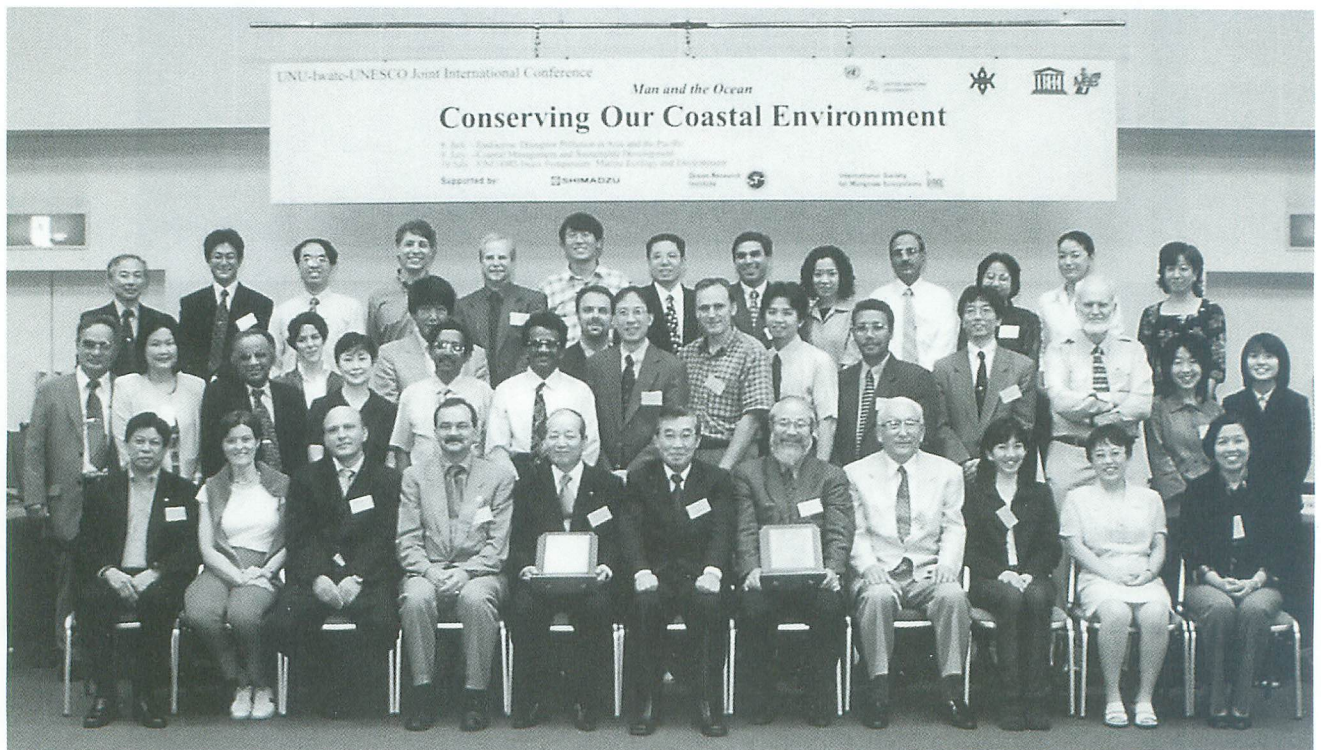
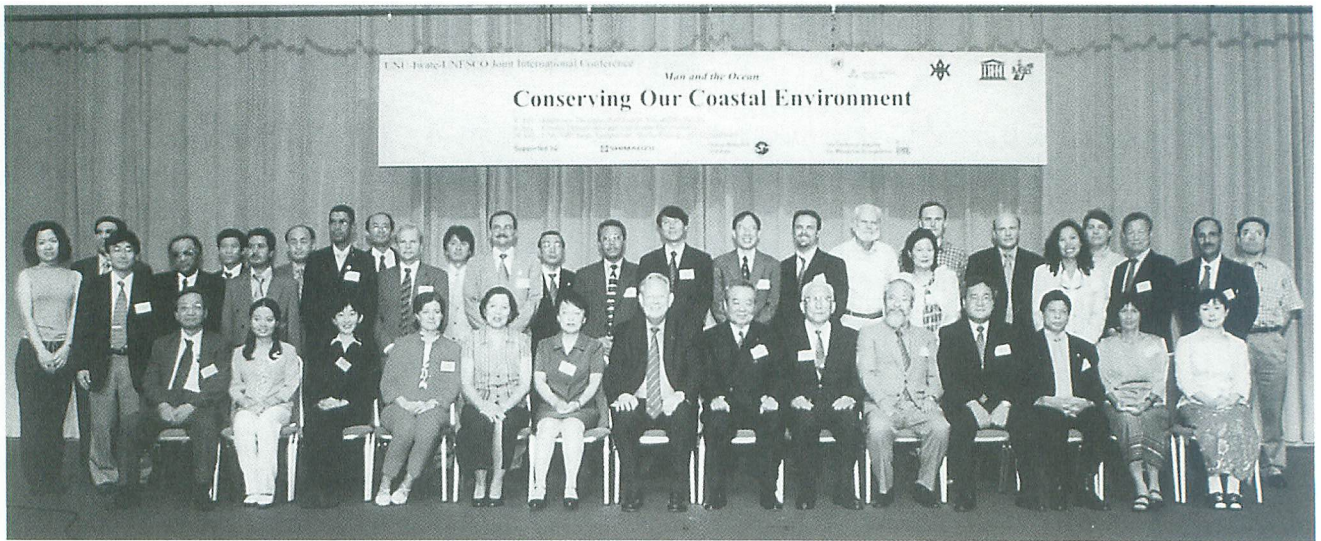
現在の世界の人口は62.6億人（World Population）で、今後、その増加が予想される。実際、250万人以上の人々が住む大都市の65%が沿岸域に集中していることから、参加者の間では沿岸域での持続性のある利用や環境保全を視野に入れた総合的な管理体制の構築の重要性が指摘され、相互に有意義な意見交換がなされた。特に、今回の出席者の多くは沿岸環境のスペシャリストであったことから、研究者が得た知見をどのように社会に還元していくかについて熱のこもった議論が展開された。参加者の中から、最新の精度の高い研究成果を学術論文として発表するのは勿論のこと、その内容を一般市民、漁業者、行政官や政策決定者にもわかりやすく説明する機会を設けると同時に、次世代を担う子供たちのための新しい教育システムを確立することの重要性が指摘された。

大槌臨海研究センターは、国際連合大学、岩手県、東京大学海洋研究所が立案し、合意してきた海洋環境国際共同研究事業（1999－2002）を主導的に推進してきた。この事業では、三陸沿岸域を中心として重要な3研究課題（1.沿岸生態系、2.物質循環、3.海洋汚染）を、北里大学水産学部、岩手県水産技術センター、釜石バイオ・テクノロジー研究所、北海道大学、東京大学、愛媛大学、神戸女学院大学、国立極地研究所などの研究機関との協力のもとに実施してきた。この活動と平行して、関係者は、社会教育や国際ネットワーク作りにも努力を払って

きた。毎年、アジアや南太平洋の国々から将来を担う若手研究者を招き、海洋環境に関する国際ワークショップを開催すると同時に、その期間中に一般市民を対象とした講演会や地元の中・高校生を対象とした特別授業を実施してきた。今回の国際会議はその集大成ということで、盛岡会場（7月11日）では岩手県の人々を対象にして沿岸海洋研究のトピックスを紹介するとともに、これまで国際連合大学、岩手県、東京大学海洋研究所が3年間実施してきた海洋環境国際共同研究事業の総括の報告を行った。この会議には、台風6号による影響があったにもかかわらず約180名の参加者があり、熱心な議論がなされた。翌日（7月12日）、会場を東京大学海洋研究所・大槌臨海研究センターのある大槌町に移し、町内の小中学生や市民を対象にした講演会（約250名）が開催された。講師の先生には海洋環境の大切さと海洋研究の最前線について講演をしていただき、講演後は講師の方々や外国の招待研究者（16名）を囲んで、地元の子供たちとの交換会を開いた。

今回の国際会議は、国際連合大学、岩手県、東京大学海洋研究所とそれぞれ異なった立場で海洋環境に取り組んでいる複数の機関がその独自性を生かした共同作業の総括の場でもあった。国際連合大学からは、これまでの一連の活動に対して、岩手県および東京大学海洋研究所に感謝の盾が贈られた。この国際機関、地方自治体、企業、大学とのユニークな組み合わせは、環境問題に取り組むシステムを構築する上で、試金石になるものと思われる。日本は1996年に国連海洋法条約を批准し、領海や経済水域の調査研究を通じて、持続的な利用や合理的な保全・管理を推進することが強く求められている。これらの活動を通じて、一般市民が沿岸環境問題により関心を深め、研究者、行政官、政策決定者などと連携して、新しいタイプの環境保全対策が実施されることを期待したい。

大槌臨海研究センターは、上記の活動をさらに高めていくためにも、全国の共同利用研究施設として、沿岸環境保全に深く関わっている日本国内の各機関と共同して研究活動を一層活発にするだけでなく、国際的な共同利用研究施設として、諸外国の研究機関とも密接に連携して地球規模での沿岸環境研究を積極的に推進し、これらの一連の活動を通じて理想的な循環型沿岸管理システムを確立し、積極的に社会に貢献して行くことを目指していきたい。





●海洋科学国際共同研究センター

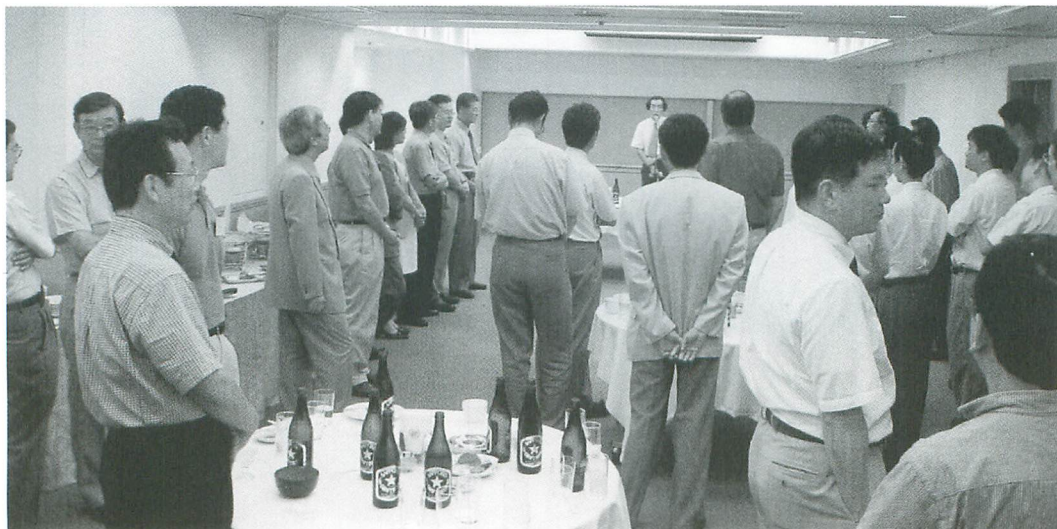
第1回日韓海洋科学合同セミナー

海洋科学国際共同研究センター教授 寺 崎 誠

本所は2000年8月23日に釜山のグランドホテル特別室で国立釜慶大学校（大学間）海洋科学研究所と部局間学術協定を締結した（ニュースレター6号参照）。昨年の秋、釜慶大学のCho教授が来所した折に、合同セミナー開催の要請があり、その後双方で日程の調整を行い、2002年8月26日、27日の両日、本所会議室で第1回日韓海洋科学合同セミナーを開催した。

釜慶大学からはMoon海洋科学研究所長他10名が来日した。小池、Moon両所長の挨拶の後、16題（物理－2、化

学－2、地学－2、生物－4、水産－6）の口頭発表があり活発な質疑応答が行われ、このセミナーは情報交換のみならず今後の共同研究を実施する上で有効であった。26日の晩は新宿ワシントンホテルで歓迎夕食会が催され、35名が参加し、昼に続いて杯を片手に談議に花が咲いた。2日目の講演の後、2004年度に、釜山で第2回目の合同セミナーを開催することを決め、塚本センター長の挨拶で閉会した。



●新スタッフ紹介

青 山 潤

海洋生命科学部門行動生態計測分野助手

出身は神奈川県

趣味はオートバイ、旅行（移動すること）

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待：

学生時代をあわせて10年ちかく海洋研に在籍しておりますが、スタッフとしてはまだ分からないことばかりでとまどっております。

よろしくお願いします。

伊 藤 幸 彦

海洋生物資源部門環境動態分野助手

出身は英国ケンブリッジ

趣味はボート、カメラ、ダイビング

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待：

5月まで海洋研の学生でした。海洋研は今年で5年目になります。皆様と共に研究できるこの一瞬一瞬を大切にしていきたいと思います。

改めましてよろしくお願い致します。

北 山 寛

事務部経理課用度掛長

出身は東京都（生まれは神奈川県）

趣味は剣道、文部科学省主催の「関東地区文部科学省関係機関等職員剣道大会」に参加しておりますが、成績の程は…。

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待：

以前は、海務・共同利用掛の金谷さんと同じ農学部附属農場にも居り農産物を見てまいりましたが、今度は海ということで、つくづく東大の研究の幅の広さを感じます。

東京大学全体としては独立行政法人化、海洋研究所としても移転や統合など課題が多く、微力ではありますが努力していきたいと思います。

小 坂 規

事務部経理課司計掛

出身は新潟県新潟市

趣味は建築に関すること、バドミントン、映画鑑賞

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待：

これまでに人文社会系研究科と理学系研究科を経験して、1月に異動してきました。

司計掛の仕事は始めてですが、海洋研究所の楽しさを感じつつ、皆様のご迷惑にならぬよう頑張りたいと思います。よろしくお願いします。

篠 崎 久美子

事務部総務課総務掛

出身は茨城県

趣味はスキー、テニス、旅行、演劇鑑賞、押花（ブライダルフラワーの額作成等）、散歩

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待：

以前は海の研究所の研究事務を行っていました。

短期間ですが、この職場から新たなことを学び、自己を高めていきたいと思っています。

嶋 永 元 裕

海洋生態系動態部門底生生物分野助手

出身は兵庫県（生まれ）・神奈川県（育ち）

趣味は読書（立ち読み）、映画鑑賞、水泳、寝ること

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待：

深海は種の多様性が高い事が知られていますが、一見一様にみえる深海底のような環境で、なぜ種の多様度が高い状態で維持されるのか？ その機構のナゾにせまれたら、と思っています。

海洋研に所属する研究室は理学系、水圏系がごちゃ混ぜになっているので、いっそのこと海洋学科にすべて統一したらいいのではないかと考えます。

嶋 村 政 義

事務部経理課長

出身は東京都

趣味は囲碁、将棋、ゴルフ、野球、テニス等ですが、スポーツについては最近参加するよりも観戦する方が多くなりました。

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待：

東京外語大会計課より転任してまいりました。平成3年～5年の間経理課司計係長として海洋研に勤務して以来、8年5ヶ月ぶりに戻ってまいりました。気持ち新たに頑張りたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

白 井 正 明

海洋底科学部門海洋底地質学分野助手

出身は東京都

趣味は読書、アウトドア…でのんびりすること

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待：

これまでの10年近くは浅海で作られた堆積物(砂)の研究をしていました。

海洋研に来て、一気に研究対象の水深とスケールが大きくなり、スリルを感じています。

これまでの経験を生かしつつ、海洋と地球の歴史を探り、その知識を一般社会に還元する…という作業に貢献できるように頑張りますので、よろしくお願い致します。

高 畑 直 人

海洋環境研究センター助手

出身は滋賀県

趣味は翻訳

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待：

海のない県で育ちましたが、自然が多く大きな湖があることもあり、水には小さな頃から親しみがあります。

これまでの研究は水を対象としたものが多く、淡水と海水の違いはあるものの、水というものを通して社会に貢献できるようがんばりたいと思います。

滝 田 統 一

事務部総務課専門員

出身は中華人民共和国(満州)で生まれ、東京都出身

趣味は旅行ドライブ(温泉)、海釣り(投げ釣り)

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待：

あと1年半で定年を迎え、最後の公務員で終われそうですが、給与が減ったり、退職金、年金が減額されそうであったり、大変な時期と思っています。

附属病院に26年、学術情報センター、法学部、大型計算機センター、農学部附属牧場それぞれ3年とまわってきましたが、海洋研究所へは初めてですので、海洋研究所の研究が重要であることを理解していけるようにと思っています。何とかみなさまにご迷惑をかけないようにと思っています。よろしくお願いします。

田 中 潔

海洋環境研究センター助手

出身は大阪府寝屋川市生まれ、千葉流山・柏市育ち

趣味は特にこれといったものは有りませんが、休日に郊外にのんびり遊びに行くことを楽しみにしています。

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待：

私はこれまで海洋の流れやその変動のメカニズム、またそれらに伴う物質の輸送過程を明らかにするために主として数値シミュレーションによる研究を行ってきました。幅広い分野において多岐に渡る手法によって海洋の研究が行われている海洋研究所では、これまで以上に様々な角度からの考察を有機的に組み合わせて地球環境問題に関わる広い視野からの海洋研究を行えると期待しています。

中 村 恭 之

海洋底科学部門海洋底地質学分野助手

出身は香川県。父親の仕事の関係で転校が多く、小学校3つ、中学校2つの学校に通いましたが「根」は関西人です。

趣味は合唱です。高校から本格的に始め、今でも週に

1日歌っています。

それから、スポーツは全般的に見るのもするのも好きです。

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待：

3年前に海洋研へ来て以来、船での仕事にもようやく慣れてきました。

これからエアガンを使った音波探査を中心に、沈み込み帯や背弧で起こっている地球科学現象の解明に貢献していきたいと思います。また、海洋底科学のみならず多分野の方々との交流によって、海洋というものを幅広く理解できるように努めたいと思います。

永 田 順 子

事務部総務課国際交流掛長

出身は新潟県

趣味はテニス。子育てが終ってからの楽しみテニスですが、プレー後の仲間との一杯は格別です。ほかに気に入ったコーヒークップや食器を集めて楽しんでいます。

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待：

大学院新領域創成科学研究科から異動してきました。

異動間もなく、白鳳丸・淡青丸の見学。また大槌臨海研究センターに行き、三陸海岸の絶景を眺めそこに生息する藻や魚たちの話を聞き、海洋研究所がとても身近に感じました。

独法化に向けて大変な時期ですが、センターも船もみんな研究所の宝、大事にしていけたらいいですね。

早 川 敦 夫

事務部経理課司計掛長

出身は埼玉県

趣味は一応、年に数回しかコースに出ませんけどゴルフということにしています。

それと、スポーツ全般の観戦（テレビで）です。

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待：

経理部から異動してきました。ただ、経理部では共

済・出納・情報処理といった一般の経理とは違った仕事をしていたので、慣れるまで色々ご迷惑かけますがよろしくお願いします。

藤 本 修 一

大槌臨海研究センター事務主任

出身は青森県八戸市です。

趣味はサッカーです。現在はテレビ観戦だけとなっておりますが、今後は子供たちへの技術指導などを行ってみたいです。

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待：

平成14年4月1日付けで岩手大学（盛岡）より参りました。

単身での赴任ですが、休日等にはできるだけ家族を連れて大槌での生活を楽しまたいと考えておりました。

微力ではございますが、大槌臨海研究センターの管理運営を通じて海洋基礎研究の発展に貢献していきたいと思います。

どうぞよろしくお願いします。

巻 渕 千 恵

事務部長

出身は東京都

趣味は趣味を持たないことが趣味（主義？）

将来への抱負あるいは海洋研究所への期待：

これまで、いろいろな機関の勤務を体験させてもらいましたが、実をいうと大学の事務は全くの不得手。ただ、子供の頃から海は好きでしたので、海洋研に対しては茫漠たるあこがれを抱いていました。

“海は広いな 大きいな。こんな生温い気持ちで異動してきた罰が当たったのでしょうか、現在大学を取り巻く改革の波は正に海洋研を飲み込もうとしています。しかし、ここが踏ん張りどころ、状況がどう変わろうと、海洋研は世界をリードする海洋研究の拠点であって欲しいと思っています。その中にあって、私のお手伝いできることは微々たることかもしれませんが、夢は大きく持ちたいと思っています。

東京大学海洋研究所

〒164-8639 東京都中野区南台1-15-1

Tel : 03-5351-6342

Fax : 03-3575-6716

ホームページ : <http://www.ori.u-tokyo.ac.jp/>